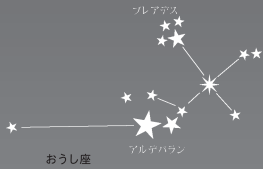


ポラリスを仰ぐ北の大地から



国宝『中空土偶』

恵庭市医師会 会長 島田 道朗

6月初め、所用で函館まで行く機会がありました。恵山ツツジが満開だということで、仲間の車に乗って道央道の終点大沼公園ICから、鹿部を回ってツツジ見物としゃれ込みました。道すがらトイレタイムに南茅部（現函館市白尻町）の道の駅「縄文ロマン南かやべ」に立ち寄ったところ、隣接した『函館市縄文文化交流センター』に、何と！北海道初の国宝『中空土偶』が常設展示されていたのでした。南茅部の「茅」と中空の「空」から「茅空（かっくう）」という愛称がつけられたということで（平成19年に、北海道初の国宝に指定されています）。

この中空土偶は昭和50年に旧南茅部町（現函館市尾札部町）で地元の主婦が農作業中に発見したもので、縄文時代後期（約3,200年前）の集団墓に埋納されたものと判明しています。高さ41cm、幅20cmで、中空土偶としては国内最大級、何処となくひょうきんな顔つきで、デフォルメされた体に衣服か入れ墨のような文様が刻まれています。その芸術性は高く評価され、かの岡本太郎氏が「縄文時代に、オレを真似たヤツがいた！」と言ったとか言わないとか、まことしやかに語られています。

縄文時代は、狩猟・採集・漁労が生活の基本でした。この地に立つと、冬の寒ささえ我慢すれば、栗・クルミ・山菜・キノコ・魚貝類は採り放題だったであろうと容易に想像できます。遙か3,200年前の太古、この豊穡の大地からポラリスを仰ぎ見て縄文人は何を思ったであろうか？などと妄想しながら、満開の恵山ツツジを網膜とSDカードに焼き付けたのでした。

函館では、活イカを堪能し（縄文人もイカを食べたのだろうか？）、五稜郭のネオンサインを仰ぎ見、翌日は、大沼でへぼゴルフに汗を流して、帰途についたのであります。



夕暮れ時の函館山

函館市医師会 会長 伊藤 丈雄

センチメンタルな「想い」に浸る余裕がやっとできてきた証か、それとも今更ながら函館の景色や情景に魅せられたためなのかどちらかは分からないが、最近函館山から見下ろす函館の景観に魅せられている。実は函館山から見る景色は夕暮れ時から見るのが一番だと思う。「函館はやっぱり夜景だ！」「100万ドルの夜景」と称賛されているが、私は函館山からの夜景よりこのなんとも言えないかなげな雰囲気を持っている夕暮れ時の函館がお気に入りだ。

陽が沈み始めそろそろうっすら赤く染まる頃、山から見下ろす函館は左に日本海・函館湾、右の太平洋に挟まれた街。海の色も日昼の濃い青とは少し違う藍色に似た色味を出す。少しずつ夜に近づき街の灯りが燈り始め、海には漁火がちらほら。奥の山々は赤く染められ、なんとも言えない情景である。よく晴れた日のほんの1時間足らずのひと時であるが夜景が一幅の絵であるなら、これは時を忘れて魅入る大パノラマであり素敵な時間だといつも思う。日昼の喧騒を忘れるかのような不思議な力を持っている。

沈む太陽と照らし始める街灯・これから漁に出る漁船の音がこの1時間の短い間に凝縮している。

機会があれば是非ともご覧になっていたきたい。大切な方との思い出作りにもオススメだ。「函館の夜景が素晴らしいのは皆知っているが実は夕暮れ時が一番なんだ。…」この後のセリフは一緒に見る相手によって変えれば良いのである（笑）。ただ難点はタイミングだ。夕暮れ時より少し早く登頂し絶好のタイミングを掴んで実行してほしい（笑）。

日々の忙しさに追われ変わりゆく季節や時間の流れを意識することのなかった私が長年住んだ街をこのように想う。時にふと見たくなくて出かけてしまうそんな場所だ。私のヒーリングスポットでもあり、ここで自分をリセットし、また患者と向き合う日々に戻る。

